

第15回白壁賞は岩男泰氏らが、第34回村上記念「胃と腸」賞は中村昌太郎氏らが受賞

どこまでもぬけるような秋晴れの2009年9月16日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第15回白壁賞と第34回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第15回白壁賞は岩男泰・他「colitic cancer/dysplasiaの画像診断—拡大内視鏡を中心に」(「胃と腸」43: 1303-1319, 2008)に、第34回村上記念「胃と腸」賞は中村昌太郎・他「消化管濾胞性リンパ腫の臨床的特徴—MALTリンパ腫およびDLBCLとの比較」(「胃と腸」43: 1067-1079, 2008)に贈られた。

第15回白壁賞

司会の野村昌史氏(手稲溪仁会病院消化器病センター)から、まず白壁賞の受賞者代表として岩男泰氏(慶応義塾大学内視鏡センター)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、“消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は応募論文1編と「胃と腸」43巻に掲載された全論文が選考の対象となった。

選考委員を代表して松井敏幸氏(福岡大学筑紫病院消化器科)は、“本日は早期胃癌研究会や「胃と腸」に関与するものにとって大変待ち遠しい日であります”と述べたあと、本論文について“癌、dysplasiaの拡大内視鏡像を主体とした膨大な研究であり、今のホットな話題である拡大内視鏡のIV型pit patternの有用性を強調されております。今後の診断に当たる者にとって大変示唆に富む論文であることでしょう”と選考理由を述べた。

「胃と腸」編集委員長の芳野純治氏(藤田保健衛生大学第二教育病院内科)は“非常に貴重な症例を1つ1つ丁寧に、そしてたくさん集められ「胃と腸」に出していたいただき、大変ありがたく思っております”と述べ、賞状と楯を贈呈した。医学書院の金原優社長からは、賞金50万円が贈られた。

受賞の挨拶として岩男氏は“白壁賞というこの上ない栄誉をいただき、本当にありがとうございます。身に余る光栄に恐縮しております。潰瘍性大腸炎に合併する大腸癌は非常に注目されている分野ですが、発見することさえ難しく、たとえ発見しても条件が悪く、よい画像を残すことが難しいという問題がありました。現に欧米



▲選考理由を述べる松井敏幸氏。



▲祝辞を述べる芳野純治氏。

の診療ガイドラインでは、内視鏡では診断することが難しいからと、ランダムに何十個も生検をして病理的に診断する方法がとられています。しかし、そのような苦しい条件のなか少しずつ症例を集め、1例1例を大切にしながら集積をした結果、このように賞をいただけたことは非常にうれしいことです。今後も、1例1例の症例を大切にしながら、1歩1歩前に進んでいきたいと思います。また、白壁先生という偉大な名前を汚すことないように精進してまいります。この仕事に長年にわたり協力してくれた仲間たちに感謝いたします”と述べた。

第34回村上記念「胃と腸」賞

次に、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。本賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」43巻に掲載された全論文が選考の対象となった。

野村氏より受賞者代表として中村昌太郎氏(九州大学大学院病態機能内科学)が紹介された後、松井氏から白壁賞と同様に厳密で慎重な選考が行われたことが報告された。また、本論文について“濾胞性リンパ腫を主体として、そのほかの悪性リンパ腫との違いを、臨床、形態診断学ならびに病理学的に、さらには治療経過までも含めた、長年にわたる膨大な研究の積み重ねによって成されたものだ大変敬意を表します。まさにこの賞に値する論文ではないでしょうか”と選考理由を述べた。

芳野氏は“中村先生は、長い間このMALTリンパ腫の研究をされてきて、その集大成であると思っております。本当におめでとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。金原社長からは賞金50万円が贈られた。

受賞の挨拶として中村氏は“伝統のある非常に立派な賞をいただきましたことは、身に余る光栄です。1993年ごろから消化管悪性リンパ腫の研究を継続してきました。今回の論文はその一環として濾胞性リンパ腫についてまとめたものです。研究を行うに当たり、多くの臨床と病理の先生方にご協力をいただきました。特に濾胞性



▲第15回白壁賞を受賞した岩男泰氏。



▲第34回村上記念「胃と腸」賞を受賞した中村昌太郎氏。



▲両氏には芳野氏から賞状と楯が贈られた。



▲受賞式会場には多くの人が集まった。

リンパ腫は小腸病変が非常に多く、九州大学でいち早くダブルバルーン内視鏡を導入された松本主之先生(九州大学病態機能内科学)のお力がなければ今回の研究は成しえませんでした。共著者の先生方をはじめ、たくさんの先生方のお世話になりましたことを深く御礼申し上げます。この受賞を励みとしまして、これからも1例1例

の症例を大事にし、みなさまのご協力を賜りながら、さらに精進を重ねてまいります”と述べた。

最後に、両賞の受賞者には満員の会場から晴れやかな賞賛の拍手が贈られ、引き続き両氏による受賞論文の概要についての講演が行われた。